

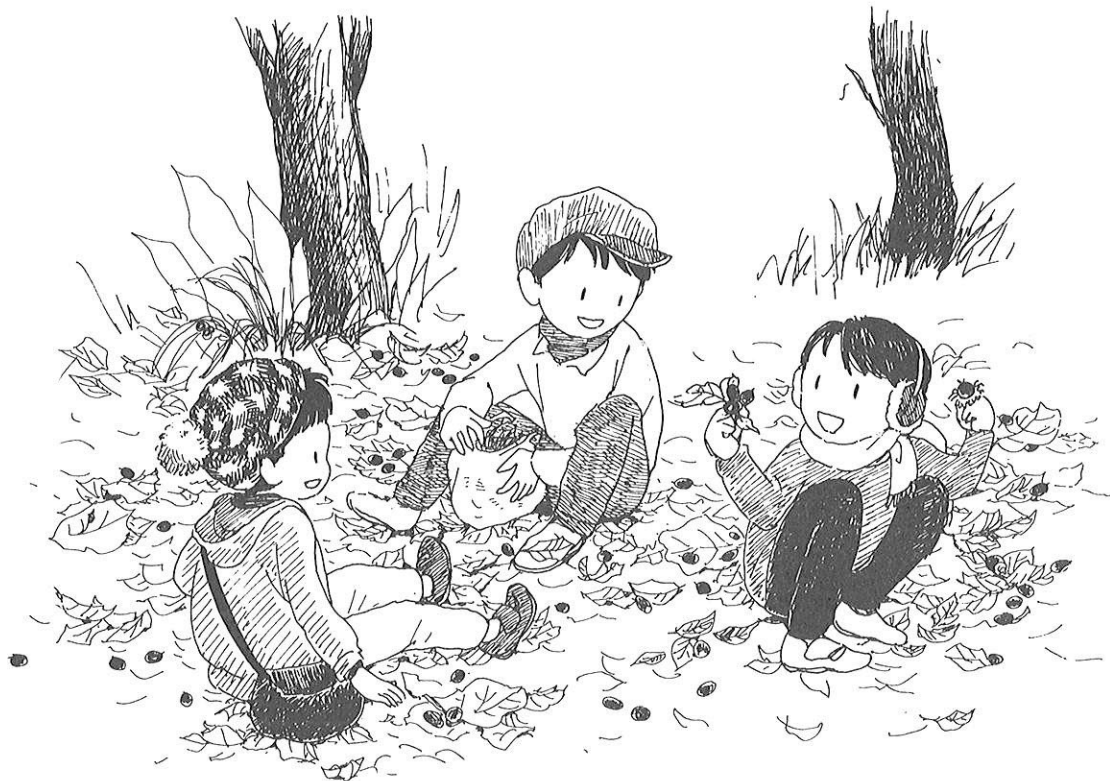
光の子



No.155 2012.11.3

●年間聖句 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。

(ルカによる福音書19章10節)



「どんぐり」

挿絵・中島由起子

「爽やか」

おのづから大利根の野の爽やかさ

大利根の黄金波打つ豊の秋

豊の秋ガードレールをしながら

大利根の子ら光る子ら稲穂る

広大に砂州を高めて秋早

案山子もとより無関心無感動

どこまでも爽やか屈強なる流れ

落合水尾

〔浮野〕主宰

雨のちの晴れ

介護老人保健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

彼女はクリスチャンで、横浜指路教会の日曜学校の先生をしているという。クリスチャンでもないのに、ホテルにしたらえられたお御堂で終生の愛を誓う結婚式とは違い、歴史のあるらしいこの教会で

もたもたしている。結果的に分かったことは、彼は結婚のために来日しているという事実。色々と忙しく、山形に来てもらうのは無理らしい。彼の提案で、私は急遽横浜で行われる彼の結婚式に飛び入り出席することになった。新婦は小中学校の同級生で、二三年前(?)に同級会で出会って意気投合したという。

フエイスブック(FB)にバラグアイの日系移住地でお世話になった澤村一番(芸名、本名は健朗)さんの名前を見つけた。どうも日本に来ていろいろ。FBで一杯飲もうと持ちかけた。返事がどうもたもたしている。結果的に分かったことは、彼は結婚のために来日しているという事実。色々と忙しく、山形に来てもらうのは無理らしい。彼の提案で、私は急遽横浜で行われる彼の結婚式に飛び入り出席することになった。新婦は小中学校の同級生で、二三年前(?)に同級会で出会って意気投合したという。

この年が、最も弱い、困難に遭遇している人々にとって、生まれてきたことを喜び、生きていることを実感して、よりよい生涯への基点となることが出来るようにお願い、原点回帰を呼びかけて始まった今年も、残り少ない暦の枚数となった。

今年度前半は、子どもの虐待が連続する中で、いじめ問題が社会的に繰り返してクロージアップされた。十月に入って早々の、広島市府中町・小学五年生の長女が母親や祖母など家族からの暴行致死事件。この子はその短い一年間の人生の六年余を社会的養護の中で過ごし、児童相談所の関わりも濃厚にあった(十月)。愛知豊橋の四歳女児が風邪を引き、その後の九ヶ月間放置され、発見時の体重が八キロだったという餓死、兄も未就学などの保護責任者遺棄事件(九月)、三重県桑名市のパチンコ店駐車場で生後五ヶ月の乳児が熱中症で死亡した保護責任者遺棄致死事件では、母は育児ノイローゼで心療内科に通院中だった(八月)、奈良市内のディスカウントショップで八歳の長女に万引させ、九月中旬、窃盗の疑いで市内に住む無職の母親を逮捕した事件、五歳の長男を暴行した無職の母親の逮捕

事件、広島県廿日市市で「子どもを殺した」と女性からの電話で明らかになった一歳未満の男児が浴槽の中で死亡した殺人容疑の事件、東京都目黒区碑文谷の会社社員の男性(四十五)宅で母親(四十二)が一歳未満の乳児に「ごみ袋をかぶせた」として死亡させた殺人未遂事件等々。

昨年度児童相談所が処理した虐待件数は五九八六二件で、大阪府が二年連続で最多で八九〇〇件。神奈川県七二九六件、東京都四五五九件、埼玉県四三六〇件と続いた。

一方、いじめ事件も相次いで報道された。滋賀県大津市の中二男子死亡事件から、境港市立中三年男子が校舎のひさしから飛び降り、全治三カ月の重傷を負った事件、大阪府大東市の市立中学二年生男子四人が同級生の男子生徒二人に殴り合いをさせ、動画投稿サイトに投稿していた事件などきりがない程である。

また、厚生労働省は十月十五日、児童養護施設などの入所児童らに対する施設内虐待の把握件数が、二〇一一年度は全国で四十六件あり、被害に遭った子どもは八十五人との集計をまとめ、社会保障審議会児童部会の専門委員会に報告した。

この国の子どもたちは、家庭、学校、施設でも、子どもの生きていくはずのあらゆる場面で、安心して生きていくことが困難になっていることを、今、全ての大人が、自分の問題として確認しなければならぬ。

子どもが育っていくために基本的に必要なものは、自分が必要とされているという意識形成と、自らの役割についての希望の確認である。

設立から二十八年が経過し、光の子どもの家も、昨年四十六件あった施設内虐待を発生させた施設と同じ条件で、年々ひどくなっていく状況を生きた子どもたちを引き受けていることで、地続きになっ



の結婚式は静粛で、クリスチャンではない私にも心の静まるひとときを与えてくれた。式の終わったあとの挨拶で新婦は「教会で結婚式を挙げるのが長年の夢で、それがかなって嬉しい」と言う。新郎は「結婚する」という長年の夢がかなって嬉しい」と返し、出席者の間に苦笑が満ちた。

結婚披露宴はまさに前代未聞だった。新郎が全体をプロデュースしているらしく、宴が始まる前から、会場に忙しく出入りしていたが、驚いたことに、四時間に及ぶ宴の司会のほとんどの部分の司会を新郎が務めた。着席しての宴会であったが、席次表もなく、受付で渡された動物(私の場合はイヌ)の絵のしるしのあるテーブルに座ればそれでよかった。そして各テーブルの構成員の概要を新郎・新婦が紹介していくのだった。

いや、そんな形のことなどではなく、百五十人の出席者全員が二人の門出を心から祝っているらしいことが、飛び入り出席した私にも伝わってきたことが、大事なポイントで、なんとも嬉しかった。

新郎の俳優学校の同期生の女性群は、失礼ながらしばみかけ始めている乳房に大きなパットを入れて腰ふりダンスを披露し、皆を爆笑の渦に巻き込み、新婦のフルート

の先生は彼女のフルート演奏に合わせて演奏するのに懸命だった。日本のアルパ(南米のハーブ)演奏の第一人者のルシア・塩満さんの奏でるアルパの響きは、静まりかえった会場を深く包み込んだ。

新郎はルシアさんの友情出演に感謝して涙し、私ももらい泣きした。一言でいえば二人の結婚を祝福する皆の気持ちがあふれ、いつか会場を支配したということに尽きる。ずいぶん多くの結婚披露宴に出席してきた私にとっても前代未聞であったし、それは新郎新婦の来し方の軌跡がそこに現出したということ以外の何物でもないだろうと思う。

とても嬉しいひと時を過ごさせてもらった。

翌日も、私が教授になって最初に教室にやってきたいわば一番弟子と久しぶりに楽しく語り、意気揚々と山形に帰るつもりであったが、冷房が効いていていつも愛用している新幹線待合室で突如暗転、晴れていた私の気持ちは曇りどころか、土砂降りの雨に陥ってしまった。

待合室はとても混んでいて、多くの人が立っていた。私は運よく立っていたそばの席が空き、座って昼酒を覚えていた。と、ちょ

つと離れたところで、続きの二席が空き、三十代と見られる女性が席を獲得、そこまでは普通の光景だったのだが、獲得した二席に座ったのは、中学生ぐらいの男の子と小学高学年らしい女の子、両親は脇で立っていた。座ると男の子はゲームを始め、女の子は漫画を読み始めた。あたりを見回してみると、席に座ってゲームに熱中している子どもたちが、少なからず居るのである。

多くの年寄りが立っているのに、空いた席に自分の子どもを座らせるという行為は、自分の子どもの溺愛という自分本位主義の延長上に位置付けられるもので、「お受験」に必死になる母親の一つの姿なのだろう。もう道徳律が崩壊してしまっているということである。「家庭が大事」という話も、子どもを社会人として育む単位としての家庭の位置づけに基づいた言葉というよりも、「自分の所さえよければ、他はどうでもいい」という家庭エゴを表すものになっ

「共育ちカンガルー日記」

(20) 鳥籠の向うの空

近藤みちる

「お母さん、ユキちゃんを幼稚園に通わせてみませんか。」

七月の個人面談で、私はクラス担任から思いがけない提案を受けた。障害児通園施設であるA園に入園して、わずか四か月余りのことだった。

入園当初こそ、初めての園生活に混乱や登園拒否が見られたユキだったが、一か月もすると園の環境やリズムにも馴染み、その後の成長は目を見張るものがあった。課題だった排泄面も自立し、偏食も克服しつつあった。何よりも、苦手だった集団行動に適応できるようになっていた。先生方との信頼関係を礎に、言葉も増え、コミユニケーションがスムーズになり、お友達に対する興味が湧き、それはやがて人に対する愛着へと膨らみつつあるようだった。

このユキの成長ぶりに、私は初めて母親としての安堵感というものを味わっていた。もう大丈夫、就学までの二年間、ここにユキを託していこうと心に決めていた。

そんな矢先の転園の話を、私は正直困惑した。

「A園でユキちゃんが身につけるべき課題は、ほぼ達成できています。最近のユキちゃんは好奇心や探究心に満ちた瞳で、周囲をしっかりと見聞きし、学びとうとしています。今のユキちゃんには、A園よりも幼稚園の方が適した環境だと思われます。」

二年前のちょうど今頃は、周囲のママ友たちがこぞって幼稚園選びに躍起になっていた。だがそれは、私とユキには別の世界の出来事のように思えたものだった。次第にユキと二人きり取り残されていったあの頃のことを思えば、幼稚園への転園など夢のような話だった。

「もちろんお母さんとお父さんのお気持ち次第です。ゆっくり考えてみてください。」

面談を終え外に出ると、園庭の大きな桜の木には青葉が茂り、優しい木陰が広がっていた。満開の花の下で迎えた入園式。

ユキは春風の中に勢いよく巣立っていった。だがそれはまだA園という大きな鳥籠の中だったようだ。

この鳥籠の中で、ユキは嵐にも天敵にも遭うことなく、安心して羽を広げ、飛ぶ練習を積むことができたのだ。鳥籠の中では自在に空を飛べるようになったユキ。私はそれだけで満足していた。しかし鳥籠の向うには、様々な風が吹き、雲が流れ、鳥たちが自由に群れ飛び交う、果てのない本当の空が広がっていた。そのことにより、気がついた私だった。

安全な鳥籠からユキを出すことは、親にとっては大きな冒険だ。ひと夏悩んだ末、私達はユキを受け入れてくれる幼稚園を探す決心をした。特別支援体制が必要な自閉症のユキを、快く受け入れてくれる幼稚園を探すことは、そう容易いことではなかった。

K園の門を叩いたのは九月半ばのこと。見学に訪れた私とユキを、園長先生は優しい笑顔で迎え入れてくれた。

ユキが幼稚園という場所に足を踏み入れたのは、この時が初めてだった。通園施設とは比べものにならない程広々とした園庭にダイナミックな遊具。そしてそこで元気に遊び回る、たくさんのお友達。それはユキにとって初めて目にした、鳥籠の向う側の本当の空だった。

たのだろう。ユキの瞳はきらきらと輝いていた。

年中クラスは、ひまわり組という名前だった。ユキはまず教室の表札を確認した後、教室を覗きこんだ。そして大きな声で「ひまわりぐみのおともだち！」と叫んだ。

私は胸がいっぱいになった。この子はもう鳥籠から出たがっている。本当の空を、たくさんのお友達と自由に飛び回りたくなったのだろう。ユキの背中が大きく見えた。そのとき、園長先生がユキの背丈にそつと屈んで、こう言った。「ユキちゃんもひまわりぐみにくる？」

「ユキちゃん、ひまわりぐみいく！」弾けんばかりの声で、ユキはそう答えたのだった。

こうしてK園への入園が決まった。来春の正式入園を目指して、この十月から両園の併用を開始し、ユキを少しずつ幼稚園の環境に馴染ませていくこととなった。

見学を終えるとユキは園庭のすべり台にまっしぐらに駆けて行った。園庭では赤と白の体育帽をかぶった年長児たちが、号令の笛に合わせて運動会の練習をしていた。秋の空は、どこまでも高く澄み渡っていた。さあ、私も勇気を出そう。親子で鳥籠から飛び立つ日は、すぐそこである。

園庭に白線あまた秋高し みちる

歩く

中島 睦雄

最近、あちこちの道で、歩いてる人をよく見かける。犬を連れて歩く人、犬に引っぱられて歩く人、一人で歩く人、二人連れで歩く人。朝に夕に、そんな人たちを見る。

いつだったか私も、友達から歩くことをすすめられた。

「人間は足から衰えるんだよ。だから、少しずつ歩いて、足を丈夫にしておいた方が良いんだ。なにも競歩大会の選手を目指さなくても良いんだよ。もう若くはないんだから。」

「そうか、そうなんだろうなあ。だけど、まだ足腰は丈夫なんだよ。この間もね、知り合いの

人が座敷から立ち上がる時に『ドッコイショ』と言って自分を励ましていたから『立つときもすわる時にもドッコイショ』と言ってかかってやったんだよ。」

「そんなことを言っていると、本

当に自分が立てなくなっちゃうぞ。」

「そうだなあ、以前ね、僕と同じ歳の友人がね『八十歳まで生くるとしたら あと〇年悔めることなく過ごしゆきたし』という短歌を作っていたんだよ。悔めることなく過ごすには、やっぱり足腰が立たなくなっちゃあ、ダメだよなあ。」

「そりゃそうだよ。だから、少し意識して歩いた方が良いぞ。」
「そうだなあ、おれも歩き始めようかな。そう、その短歌の友達もね、もう二十五年も歩いているんだって。だからおれと同一歳なんだけど、見るからにシヤンとして健康だよ。」

「理屈は何でも良いから、歩いた方が良いぞ。自分のためにな。」
そんなことで、私も歩いてみることにした。朝五時に家を出て、畑の中の砂利道を行き、そのうち車の通る舗装道路に出、往復三十分程度歩くことにしてみた。

本当は五千歩程、毎日歩くのが良いとのことだが、急にそんなに無理をすると、長くは続くまい。「どうせ三日坊主だろうから。」と言う友達の期待に添ってしまいうのも残念だから、余り無理はしないことにした。

頭の中で、歩数を数えながら歩く。しかし、途中で知り合いの人と出会うことがある。

「お早うございます。」
「やあ、歩いてるんですか。」
「ええ、何とか続けてみようと思ってる。」

などとやっていると、歩数がわからなくなってしまう。

決まった時間に歩くと、決まった人と、だいたい決まった場所に出会う。それにしても、五時少し過ぎという早い時間に、部屋の明かりがついて、家の人が動いている、仕事に出る準備で車を動かしたりしている人がある。以前の私なら、まだフトンの中で、半分ウトウトしている時間だったのに。

そんなことで、歩いてみると、途中暑くて汗が出てくる。私は、東京ドームでの巨人戦でもらってきたオレンジ色のタオルを首に巻いている。時々、これで汗をふくのだが、夜明け前のうす明かりの中で、この赤タオルは遠くからも良く目立つ。時どき、同じ赤タオルの人と出会うが、顔はわからなくても、いつもの赤タオルの人だと、すぐわかる。

東京ドームでの巨人戦に於けるこの赤タオルは、ものすごい。何万人という観衆が見守る中、巨人

の選手がヒットを打つと、或いはホームランでも打とうものなら、ドンチャンドンチャンという大音響と共に、赤いタオルが振りまわされる。私は特別に応援している選手がいるわけでもないが、まわりの人たちに合わせて赤タオルを振ってみる。

《巨人戦 赤いタオルで 大騒ぎ》
うす明かりの畑道で、この赤タオルを振ってみる。余りおもしろいものでもない。

歩いていくうちに、いつものことだが、電柱の上にカラスが何羽か居て、カアカア鳴くのである。《赤タオルが来たぞ。気をつけろ》とでも言っているのかも知れない。

このあいだ、例の友達に会った。「どうだい、続けて歩いているかい。三日坊主じゃないの?」
「とんでもない。三日坊主なんかじゃないよ。もう四日歩いたよ。」
「なんだ、あんまり威張れた話じゃないね。」
そりゃあそうだろう。電柱の上のカラス達は本当は「阿呆!アホウ!」と私をからかっているのかも知れない。

子どもたちの季節 仙道家

九月も後半に入りましたが、まだまだ残暑が厳しいです。皆様お元氣でお過ごしですか。

二期期に入りすぐに運動会の練習に取り組んでいた子どもたちは、毎日クタクタになって帰ってきていました。その姿を見ていただに運動会での感動はひとしおでした。

初めての運動会をとっても楽しみにしていた一恵。練習では二位だった徒競走で、本番で一位を取りました。元から走る事が得意な正太郎は最下位でのゴールでしたが、とても素敵な笑顔で踊るようにゴールしました。高学年の組体操では、危険な技に真剣に取り組み姿に心を打たれました。

運動会が終わり、帰宅した子どもたちは疲れも見えましたが、良い顔をしていました。練習の成果を見られたことも嬉しかったのですが、それぞれが自身が頑張った事や辛かった練習の事を沢山話した。

てくれたのが何より嬉しかったです。

今から来年何組なるか楽しみにしている一恵に「気が早い」と声を掛けつつ、私自身も来年が楽しみだと思っています。

田口 貴子



光の中で

佐藤家

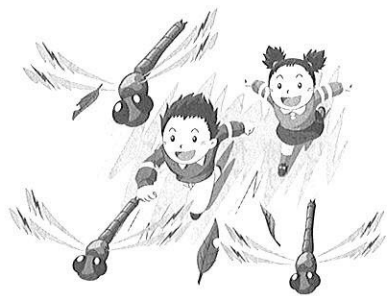
厳しい暑さの夏も終わり、秋の気配が感じられるようになってきました。皆様いかがお過ごしでしょうか。私が担当している子どもたちは夏休みの思い出をたくさん作ることができました。みんなで映画を観に行ったり、プールや温

泉に行ったり、バーベキューを楽しんだり、楽しい夏休みになったと思います。

一番学年が上の詩音はこの夏、秋田に五日間連れて行ってもらいました。私のグループでは詩音が一人だけ、他の子どもたちに混じって秋田に行くことになったのですが、夜寝るときなど寂しそうにすることもありましたが、でもいざ出かける時には「いつてきまーす！」と元気に嬉しそうに出掛けていきました。五日後、秋田から帰ってきて「たーだいまー！」と抱きついてきた詩音に「楽しかった？」と聞くと「全然楽しくなかった。」という意外な返事が返ってきました。詩音が言うには、海が本当に怖くて、楽しかったのは高校生の真理と一緒に寝てくれたことだけ。今でも「海行くよー」と言うと、本気で怖がって逃げ回ります。怖い物知らずの詩音に、コワイモノが出来た夏でした。幼稚園生の二人は、運動会や他の行事がたくさんある二期期を迎

えています。私もお弁当づくりや応援を頑張りたいと思います。

岩瀬 志穂



原田家日記

秋も深まってきて、日が暮れるのも早くなりました。日が落ちてしまっても外で元気に遊ぶ子どもたち。「もう帰っておいで」という声が庭に響きます。四月に中学校へ入学した美貴。夏休みのある日、部屋から出てきた美貴の肩が半分ありませんでした。前髪も額の半分より上の長さです。「どうしたの？」

「切ってもらったら失敗しちゃった。ハハハハ。」

と、バツが悪そうです。同じ中学生の丘実に切ってもらったとの事でした。

「小学生の時も綾に前髪切ってもらって失敗したよね。子ども同士でやらない方がいいよ。」と言ったものの、わかったのですか。

「夏休みだけ髪の毛染めていい？」と聞いてきた事もありました。そうかと思えば、「Aちゃん髪の毛染めるって言うてるんだよ。やめさせた方がいいよね。」と友だちを心配する事もありました。

どちらも『美貴なんだ』と思いつつ、ダメな事はダメと伝え、良い面を正當に評価しながら、美貴がまっすぐ成長することを願っています。

池田 祐子



季節のおとずれ

竹花家

十月に入って爽やかな秋の空気に包まれています。子どもたちは夏休みが終わって早一ヶ月が過ぎ、長い二期期を過ごしています。

運動会で素晴らしい活躍を見せてくれた楓と冬子。練習よりもはるかにいい出来に大満足の二人でした。見ているこちらも何となく誇らしいような気持ちになり、高望みはしないようにと思いつつながら「来年はもっと素晴らしい活躍を！」と、表には出さずとも期待しています。

さて中間テストを目前に控えた中学生の要と美也子。こちらは「前回よりも少しでも良い点数を！」の願いは切実です。彼らがテスト前に呪文のように毎回言う台詞「漫画とかドラマだったら全部すぐ覚えられないのにならう」には「興味関心の不足と勉強時間の不足！」と即答します。気持ちには痛いほど分かるのですが、現実には立ち向かうには厳しい言葉も必要だろうと叱咤激励の日々です。

子どもたちの今のありのままを受け入れる事と、子どもたちが今

よりもっと自分の可能性を拡げていけるように後押しする事。この二つは決して矛盾する事はありませんし、どちらも欠けてはならない大事な要素だと思っています。

鈴木 洋一



河のほとり

倉澤家

この数年で、孫の数が増えました。と言っても我が子はまだ中学三年生。正確には卒園生の子どもたちなので「孫もどき」になるのでしょうか。

保奈美のお腹の中にいる時から三歳になるまで一緒に生活してきた太一は、私にとって初孫のような存在です。保奈美が新しい家庭を築き、三歳になると同時に引

秋も深まってきて、日が暮れるのも早くなりました。

日が落ちてしまっても外で元気に遊ぶ子どもたち。「もう帰っておいで」という声が庭に響きます。四月に中学校へ入学した美貴。夏休みのある日、部屋から出てきた美貴の肩が半分ありませんでした。前髪も額の半分より上の長さです。「どうしたの？」

越し、現在は倉澤家から車で十五分ほどの所に住んでいます。それでも孫とおばあちゃんのような関係は継続し、夏休みやお正月はもちろん、一ヶ月に一回程度、太一は一人で倉澤家に二泊三泊してきます。来たら来たで、やかましく動き回る太一の相手をするにはかなりのエネルギーが必要なので、帰った後はフーッとため息が出ます。しかし一ヶ月もしないうちに「太一に会いたい！」と思うのです。昨年十月、太一に弟ができ、孫もどきが増えました。そして今年七月に卒園生が産産し、また一人孫もどきが増えました。よく孫はかわいいと言いますが、まさにそれです！我が子とも、担当の子とも違う、特別なかわいさがあるのです。とにかくかわいくて、ついつい何でも買ってあげたくなってしまうのですが、これでは甘やかしすぎると自分を戒め、我慢しています。

まだまだこれから孫もどきが増えそうですが、学校や幼稚園のおじいちゃんおばあちゃん参観に行くのには、抵抗を感じている私です。

倉澤 智子

養育論の試み その7

隣る人5

菅原 哲男

隣る人の原型は、母となるための必要十分条件としての受胎を契機にした母子関係にある。母子関係が発生する以前に父となる男性との相愛がある。相愛は盲目と称されてきてもいる。あるいは、お医者様でも草津の湯でも治せない難病にもたとえられている。そのような関係の中で、ひとりの存在である女性が妊娠する。それは自分の体の真ん中にもうひとりのいのちを抱えることである。子どもが生まれるまでの二百八十日前後は母は単数だが、相続権などの法律的な世界では胎児はひとりの受益権を持つ人格として認知されている。母親の胎内にもうひとりの人格が生まれ育ちながら存在している。一人の人格に複数の人格が存在することの具体的な証例だろう。

出産により具体的存在として二人人格となり親子という単位になる。しかし、心理学や精神医学などは新生児期を胎生期とも言っている。親子、特に母子は二人居ながら一人人格に近いというのだ。別々に隣

にしながら一人格なのである。

この時期の母子関係は情緒的に一人格であるといえる。子どもがむずかると母親はミルクかな、おむつかななどと不安になる。子どもの不快が母の不安になるのである。子どもがミルクで空腹を満たし元気になる、きやっきやっと笑い出すと母もうれしくなる。子どもの満足感が母の快になるのだ。存在することのプラスもマイナスも共時的に共感するのである。この共感的関係が日常を形成する。

母と子は相互に抱き合い、母は子どもに没頭する約半年から一年がある。ほとんど相愛と言われる異性関係にたとえられる状態である。ウイニコットが示した原初的母性的没頭の時期である。母にとって子どもは隣る人となり、子どもが母に隣るのである。人の悲しみを悲しみ、喜びをともにすることをこの時期に学習するのだろう。

このように見ると、受胎後の十ヶ月と、新生児期をあわせて一年半から二年ほどが、子どもと母親

は一人格ながら二人格である期間だろう。この期間は母子が密接に隣っているのである。まさに難病とも言われる異性間の相愛とも言える状態なのである。

アンリ、ワロンは、生まれた子どもがことばを獲得する以前に、生まれた子どもと、そばにいる母親などの養育者である環境や周囲との未分化な状態が、その私（自我）と他者との二重化状態を生成するという。そのような混沌とした快と不快などが共時的に経験されて、私と私以外にはつきりした境界がない状態：まさに没頭する母親と絶対依存する子どもの関係をさしている。

そして「私」と周囲との二重化、次第に「私」と周囲との曖昧さが薄れて分化し、「私」と「あなた」が生成される。快不快を中心にした私の存在から、他者を識別し、私と他者が同時に存在する状態それをワロンは二重化と言う。そこから個人としての分化へという道をたどって自我が生成されるという。（上西知子・北海道大学院）

自我、この私が形成されるためには、二重化状態における受けとめ手としての、他者を含めた環境が必須なのだという。

児童養護施設を利用する子どもたちは、その根底から受け止め隣るはずの親や家族から、生命身体

現場から

続・光の子らしく

岩崎まり子

強い陽射しの中にはまだ残り香のように夏を感じますが、日暮れの色合いやその早さに季節が確実に変わったことを知らされます。皆様、お元気でいらつしやいますか。

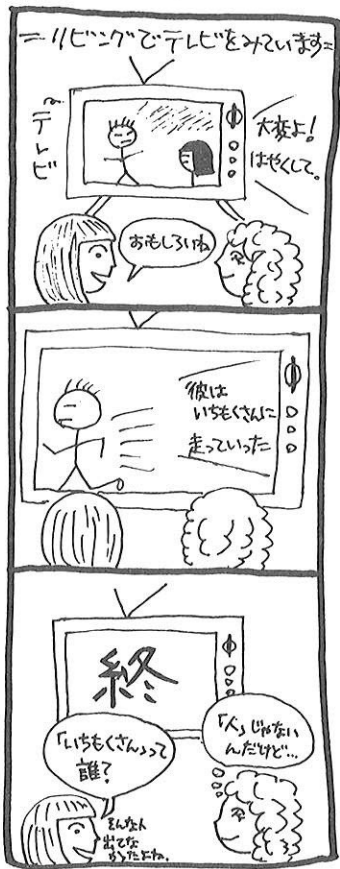
夏休みという季節が放つオーラは、子どもたちのエネルギーと共鳴し合うときに特別なオーラとなります。そこに思春期や反抗期という季節が重なるとう最強のエネルギー放出となり、私たちは心休まる暇もないという状況となります。

この夏休み、連日連夜、何かしらやらしてくれた丘実。その日

も部活をさぼって近所をふらついていたという事で学校へ謝罪に伺ったのですが、その午後、用意しておいた昼食を全て捨てて、「遊んでくるから。」と出掛けようとし、私と激しい言い合いになりました。

「子どもなんだから自由にしてい

「言い過ぎた。ごめんなさい。」



と言いきてくれ、そのときにたくさん話をしましたが、その中で丘実は、

「お母さんに電話して。」ということも言っていました。

この夏休み、いろいろなことが不満な様子で、夜、いつまでも文句言われないで遊びたい。携帯電話が欲しい。好きなだけお金を使いたい。とにかく好き勝手やりたい。そして、それを邪魔しているのは私であり、光の子どもの家であり、お母さんと暮らせるようになれば全てうまくいくと思っているようなところもありました。

「お母さんのうちに一回だけ泊まったことがあるの、覚えてる?」

「普通だったっていう風に覚えてるんだね。まり子さんは忘れられない。小さい丘実ちゃんが大きい荷物持って、怒りながら、でもとても心細そうに一人ぼっちで駅で立ってた。お母さんは、うんと離れた所でやつぱりすごく怒りながら立ってた。まり子さんが行ったらすぐ帰ろうとして『待って下さい』って言った。その手を振り払って『もう関わりたくない』って行っちゃったんだよね。まり子

さんは悲しかった。忘れられない。」

離れている間お互いを美化し、一緒に暮らせたらどんなに幸せになれるだろうと思ってしまうのは丘実だけではありません。現実の世界に不満があれば尚更でしょう。

「大人がみんな知っているのに丘実だけ知らないっていうのが嫌なの!」

と、母のことを知れたが一方、聞く勇氣はないということ。苛立ちが募るのでしょう。二回目の真実告知について検討しなければなりません。

時に激しく否定され、拒否されても、私が具合の悪いときや、雷のこわい夜など、

「まり子さん!」と何となく傍に居たりして憎みきれません。これから先も穏やかな日々など夢のまた夢でしょうが、許される限り一緒に暮らしていこうと思います。数年前、いえ数十年前の实りを願ひながら...



来年度も基準外職員確保のための
バザーを行う予定です。

バザー物品のご協力を
よろしくお願いします。

光の子どもの家バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2012年6月～7月

2012年6月現在

幼児4名 小学生16名 中学生8名 高校生7名 計35名

2日 光の子どもの家の基準外職員確保のための「小さくても大バザー」開催 全国からのバザー物品のご協力と多数のボランティアの皆様のおかげで今年も盛況 心から感謝

5日 ILBS国際福祉協会の受領会へ田中施設長と菅原理事長が出席 ご支援により施設建物の補修が可能となった 感謝

15日 光の子どもの家タ礼拝に東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師が説教奉仕 感謝

19日 今年のバザー反省会に光の子どもの家後援会の皆様としずくの会の皆様が来訪 来年のために貴重なご意見を頂く 感謝

22日 光の子どもの家職員礼拝に若月健吾牧師が司式説教奉仕 感謝

29日 卒園生の浩伸の自衛隊学校終業式へ穴水指導員が出席 希望通り航空学校へ入校が決まり誇らしげな表情

30日 小児精神科医の星野医師が来訪 勤務地の異動後も光の子どもの家の子どもの心へのケアを継続して行っており 感謝

7月

3日 アメリカのUCデイビスよりインターンシップ生のトム・リーダーさんとマイク・パラスさんが来訪2ヶ月間子どもたちと共に生活する中で日本文化を学ぶ

6日 光の子どもの家職員礼拝に若月健吾牧師が司式説教

奉仕 感謝

9日 小学校との連絡会 子どもたちの学校での様子を先生方から伺う それぞれの頑張りや今後の課題を共有し今後ともご協力をお願いしている 感謝

11日 光の子どもの家後援会の皆様によるそば会 普段お世話になっている小学校の先生方も来訪しこの夏も頑張ろうのメッセージを頂く 心より感謝

20日 小中学校一学期の終業式 夏休みオープニングパーティ 高校生7名が中心となって準備した この夏休みを良い思い出や頑張りでいっぱいにと大人も子どもも決意

23日 小学校5、6年生が3泊4日で長野県八ヶ岳登山 天気にも恵まれ全員で2つの山を縦走 山頂から白駒池を眺めた可弥ちゃん感動

26日 小学校2、3、4年生が3泊4日で長野県蓼科山登山 こちらは天気が心配されたが無事全員で蓼科山登頂 頑張りやを互いに認め合う貴重な思い出となった

〈6月7月の物品ご寄贈者さま〉

大村真理 小林加吉 中田幸雄 羽部秀男 星野冬木 奥田哲也 木田浩靖 市川敬治 大槻貴宏 豊国道江 齊藤直子 大淵ヤス子 平野肉屋 松本明子 真田明恵 鈴木一夫 長谷川一男 木村栄 新井豊子 佐藤祥子 白石澄雄 川口雅資 中村久美子 木暮伸二 他多数の各位さま

☆今年の夏休みも本当に多くの方々にお世話になりました 有難うございました (洋)

//////—[反] [射] [光]—//////

☆空気が天まで澄み渡るような季節です☆今年度も折り返し地点を過ぎて今までの取り組みを省みながら後半の目標を見定めております☆多い時には週二回の職員会議を設け光の子どもの家の子どもたち一人ひとりについて気付いたことや考えていることを共有します☆それぞれの職員が一人で子どもを抱えているのではないという当たり前のことを思い出す☆当然と言われることを改めて考えてみると子どもたちの周りには学校の先生や地域の方々などたくさんの応援者がいて近くから遠くから様々な形で支えて下さっています☆会議に参加しているのは勿論職員のみですが私たちの何十倍もの方々が子どもを見守っていて下さると考えるだけで心強く感じます☆ほんの少しの事すら満足にできない私たちの至らなさを補って余りある子どもたちの寛容さに加えて力強い応援者の皆さまがいる☆深く感謝を覚えつつ今後とも光の子どもの家を改めてよろしくお願い申し上げます☆ (洋)